

# 温泉の開祖

# 坂井量之助

をかかえての開湯であった。

北国街道下戸倉宿の下の酒屋坂井家は素封家であった。分家の坂井家から本家の養嗣子となった坂井量之助（1859〜1905）は16歳だった。器の大きい量之助は家業の酒造業に従事しながら事業欲に燃えていた。

明治19年、27歳で県会議員に当選した量之助は、冠着山入会権紛争の調停に力を尽くした。明治17年2月羽尾村に對して入会五か村（下木柳村・内川村・上徳間村・若宮村・須坂村）間の深刻な入会権の争いであった。その後、自由民権運動に関して収監された量之助を五か村の人々は助命嘆願を行い、恩に報いた。さらに宿駅制廃止、信越線の開通などでさびれた下戸倉村を元に戻したいと温泉の開削を進めた。戸倉温泉は明治初年（1868）発見された。

場所は、若宮村・下戸倉村、上山田村の三村境界付近の川原であった。明治26年、34歳のとき長野県の許可を受けて宇向島川原で仮開湯式をあげた。しかし、千曲川の洪水に引湯管を流され、多くの難題

柳沢和恵氏が著した「温泉の開祖坂井量之助翁」より伴野氏の記述の部分を次のとおり引用する

興廃この一戦にありと、坂井氏は自ら第一線に立つて男女の夫婦が「エンヤラサ、ヨイトコマカセノエンヤラサ」音頭面白く太綱を引っ張って、矢尻のついた3インチの鉄管を打ち込む。・・・坂井氏は「熱泉が噴かなければ地球の軸までも掘ってみせる」と昂然たるものであった。果然、噴いた。噴いた。熱泉が噴き出した。華氏百二十度という高度の温泉である。やぐらをあげてから十八日目であった。



坂井量之助 肖像画  
(坂井銘醸に展示)

た。傾く家計のため九州の炭鉱事業をはじめようと現地に向かう途中で急性肺炎を発症し引き返すも長野赤十字病院で、急逝した。明

明治31年、9月の大洪水で戸倉温泉は流失し、その復旧のため「戸倉温泉株式会社」を発足させた。この水魔から源泉を守り、千曲川右岸の宇大西地籍（今の白鳥園付近）まで引湯して戸倉温泉を再興した。明治36年、ここに「清涼館笹屋ホテル」を開業した。ホテルという名称は新しい時代の息吹であった。

事業推進に燃えた量之助は、長野茂管の裾花川で水力発電事業を起し、戸倉村の「組合製糸競進社」も起業した。県内で最初の事業であった。さらにこれらの事業で傾きかけた坂井家の家計を興そうと、越後・新津町外金津村に坂付近の石油鉋を手に入れ掘削をはじめたが失敗であつた。

治38年2月、量之助は46歳の若さであった。遺族には大きな負債が残された。

一方で、地域の発展を願った量之助は、戸倉村の興隆のため坂城屋代間に戸倉停車場を招致するため請願を繰り返した。戸倉温泉の開湯はこの活動に大きく貢献した。明治45年2月、戸倉駅が開業した。量之助の死去7年後のことである。駅への取り付け道路は坂井家の土地であった。

昭和31年、千曲川左岸堤防上に「温泉の開祖坂井量之助翁頌徳碑」が建立された。



坂井量之助翁の碑（戸倉温泉堤防上）

参考・引用文献  
柳沢和恵「温泉の開祖坂井量之助翁」  
坂原良一・坂井永一「坂井修一翁伝」  
資料提供  
坂井銘醸酒造コレクション  
戸倉 竹内長生